

プレゼンテーションⅡ 「待降節・降誕節—主の降誕と新年の祝い」

市瀬英昭 (日本カトリック典礼委員会委員)

典礼暦年には「顕現の季節」(顕現周期)と「過越の季節」(過越周期)の二大サイクルがあります。後者が「いのちのサイクル」とすれば、前者は「光のサイクル」です。本日の“開会の祈り”で「あなたは御子キリストの誕生によって、闇の中を歩む民を希望の光で照らしてくださいました」と祈りましたが、それはこれが基になっています。

待降節の 2 つの特徴

資料は『典礼暦年に関する一般原則および一般ローマ暦』を中心に、『朗読聖書の緒言』(カトリック中央協議会、1998 年)を用います。配布資料に記しましたが、「待降節は二重の特徴をもっている。第一の主の来臨(受肉)の追憶と第二の来臨(終末時)の待望。この理由で、待降節は愛と喜びに包まれた待望の時となる」(『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』39 番)という内容をまず確認したいと思います。待降節の 4 週間は構造としては復活祭を準備する四旬節と同じですが、内容としては悔い改めの季節ではありません。そして「待つ」ということと、「愛と喜びに包まれた時」であることが特徴です。なお、典礼色は紫です。

待降節には 4 つの主日が準備されています。第 1 主日から順に、「目覚めて待つ」、「主の道を整える」、「主は近い、喜べ」、「みことばは人となった」をテーマに、各主日にふさわしい聖書の朗読箇所が選ばれています。この約 4 週間が、第 1 主日から 12 月 16 日までと、12 月 17 日から 24 日までの間に 2 つに分かれていることは、『朗読聖書の緒言』94 番に書かれているとおりです。前者では終末的な来臨の待望が表現され、後者は第 1 の到来、すなわち受肉の祝いのための準備期間とされています。同じことは「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」にも記されています(39 番と 42 番)。この期間に共通する公式祈願、聖書朗読、叙唱のテーマは、「主の受肉と栄光のうちの再臨」、「救い主の待望」、「二重の到来」、預言者イザヤ、洗礼者ヨハネ、マリアのような「人物による直前の準備」になります。ここで準備期間の第 2 部、つまり 12

月 17 日から 24 日について見ておきたいと思います。まず公式祈願の、受肉と栄光のうちの来臨の待望の祈りに、今述べた 3 人の名が出てきます。また、12 月 17 日の朗読箇所はご存知のように「イエスの系図」です。ちなみに、ここからアレルヤ唱の旋律が変化するので、直前の準備に入ることが耳でも理解されるようになります。

「イエスの系図」(12 月 17 日の福音朗読)

12 月 17 日の福音朗読の箇所「イエスの系図」は、旧約聖書と新約聖書の救いの一貫性について学ぶ季節に適しています。12 月 17 日に朗読される系図の箇所についてのレイモンド・E・ブラウンの解説がありますので紹介したいと思います¹⁾。ブラウンはまず、たとえば、キリスト教について知らない人にイエスの物語を語る際、最初にこのキリストの系図の箇所を示さないのは一般的かもしれないが、実はこの系図は非常に大切だと述べています。ここに、ギリシア正教会もローマ・カトリック教会もプロテスタント教会もすべて、イエス・キリストについて信じている大事なことが書いてあります。

系図は名前が並んでいるだけですが、それぞれの名前とその背後にいろいろな意味があり、それは大きく 4 つのグループに分かれています。第 1 は「族長たち」、第 2 は「王たち」、第 3 は「無名の人々」、第 4 が「5 人の女性」です。各グループには優れた人が書かれているわけではありません。たとえば、族長たちはアブラハムから始まりますが、長男のイシュマエルではなく弟のイサクの名が、年上の正直なエサウではなく彼から長子権をだまし取った年下のヤコブが書かれています。そしてヤコブの子どもたちの中でも最も優れたヨセフではなく、ユダとその兄弟が記されています。ここでは、人間の功績によらず、自由に恵みを与える神の救いの神学が描かれているとブラウンは指摘しています。次の王も同様です。14 人の王の名が記されていますが、ヒゼキアとヨシュアだけがまともな王で、残りは偶像崇拜者、殺人者、不

適格者、権力の亡者、後宮のぜいたくにおぼれる者といってもよい人間たち、そしてダビデ王自身がこの清濁を合わせもった、聖人と罪びとが結合された人物であると書いています。神によって立てられたものでありながら、しばしば墮落してしまった王制も「イエスの系図」の一部です。族長のような個人だけでなく、王という支配者に体現される王制といった制度、組織、構造のようなものも、系図には含まれています。そして第3のグループ「無名の人々」では、シャルティエルとゼルバベル、そして最後のヨセフとマリア以外の人は、何か重要なことをしたという意味で系図に加えられているのではない人々です。このように、神は無名な人々を用いて国の復興の担い手として、という指摘がされています。第4グループの「5人の女性」、タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻、マリアもそうです。

この系図の神学は、イエスの起源を示すだけでなく、その「続き」も示しています。系図で示されているように、神がさまざまな人を用いて救いの道を作ってきたならば、これからもまたそうであろうということです。聖人ばかりではなかったということは、聖書にも書いてあるとおりで、また教会の歴史を見ても理解できることと思います。ですから、「私は罪びとですからできません」というのではなく、救済史の中に取り入れられているのです。引用すると、「イエス・キリストの物語をこの世界のなかで続けるために、自分は重要でもなく意味のある貢献もまったくしていないと感じているなら、それはイエスの『系図』を裏切ることだ。待降節の典礼でこの『系図』を朗読するのは、私たちの重要な天命への希望を私たちに与えるためなのだ」²⁾。つまり、自分が罪にまみれ、弱さに囲まれた者であっても、この福音の担い手として貢献することができるのだ、という勇気を呼び起こすための「系図」の朗読となるのです。

このように一年に1度、これらの名前が聖堂で読まれる必要があるということが、力強く感動的に語られています。イエス・キリストの系図として、アブラハムはイサクの父であった…エッサイはダビデ王の父であった…、というマタイ福音書の系図に続くのは、「イエスはペトロとパウロを召し出した。……パウロはテモテを召し出した。……だれかがあなたを召し出した。……そしてあなたもだれか他の人を召し出さなければならな

い」³⁾という呼びかけの物語になっているとブラウンは書いています。系図は名前の羅列でおもしろいものではありませんが、待降節の大事な日にこれが読まれることについては学ぶ必要があります。聖書と典礼のカテケージスが十分になされれば、系図が読まれるたびにそこにある物語が思い出され、信仰の学びがなされるでしょう。これが第1の特徴です。

待降節の後半部のその他の特徴

待降節の後半部、直前の準備のもう一つの特徴は、「おお、アンティフォナ (O antiphona)」、「おお、交唱」と呼ばれるものです。「教会の祈り」の晩の祈りの福音の歌の交唱で歌われるもので、「O」で始まるのでこのように呼ばれています。ご存知のとおり、「おお、英知よ」、「おお、主よ」、「おお、エッサイの切り株」、「おお、ダビデの鍵」、「おお、朝日」、「おお、諸国民の王」、「おお、インマヌエル」という7つです。最後の部分は「来てください」という嘆願で結ばれています。「教えに来てください」、「あがないに来てください」、「救いに来てください」、「救い出しに来てください」、「照らしに来てください」、「救いに来てください」、「助けに来てください」という祈りです。7世紀のローマにさかのぼる形式で、聖書に由来する祈りとして非常に荘厳な歌になっています。旧約聖書の預言書や知恵の書、あるいは新約聖書の語彙を使った救い主への呼びかけであり、「真の神であり、真の人である」キリストへ、「来てください」という呼びかけとなっています。これは偶然か意図的になされたのかは分かりませんが、「英知よ」以下のラテン語の頭文字を逆に並べると“EROCRAS” (明日、わたしはいるだろう。明日、私は来るだろう)というイエスの答えが見えてきます。これは黙示録の最後の言葉、「然り、私はすぐに来る」(黙示録 22・20) と関連性があります。そうしたこともあり、聖書の直接の引用ではありませんが、この伝統的な歌は待降節に歌われ、非常に味わいのあるものとなっています。

典礼秘跡省の指針『民間信心と典礼』(2001年12月17日)の中でも、この交唱について提案があります。12月17日以降、晩の祈り、つまり「おお、アンティフォナ」を歌う祈りを信者とともに行うことを勧めています。またその際、司式者の説教や共同祈願で、香を使いながら雰囲気味わ

うことも勧められています(103番)。ほかに、待降節や降誕祭のクリッペ(馬小屋)も指針で紹介されています。これはアッシジの聖フランシスコが始めた13世紀からの習慣です。とくに、その準備のために子どもたちが重要な役割を果たすことができること、子どもを含めた家庭全体でクリスマスの秘義を味わう大事な季節であることが記されています。また、クリスマスリースや待降節の輪(4本のろうそくを立て、1週間ごとに1本ずつともしていくもの)なども、光が近づいてくるプロセスを体験するのによいと紹介されています。シンボルとはいろいろな意味をもちうるため、クリスマスツリーの「木」の中にも、エデンの園の木、十字架の木などを重ねてもよいだろうとされています。

先ほど、クリスマスとあがないについての話になりましたが、クリスマスツリーは17世紀に登場し、最初の飾りはりんごとホスチアだったそうです。ホスチアはまさに奉獻のシンボルです。民間信仰の場でもこうしたものが表れていて興味深いと思います。また、「喜びの希望の中で待つ」ということも重要だと思います。現代は「待つ」ということがなかなかできませんが、我慢することも含め、待望することの大切さがあります。10月下旬になると町は早くもクリスマスムードになりますが、フィリピンでは9月から準備しているそうです。文化的なこともあります。これも早すぎるでしょう。ともかく、喜びの中で、希望をもって「待つ」、ということを実践しなければならぬと思います。学校などの行事で、クリスマス会をいつ行うかという問題もあるでしょうが、そうした場合も、本質を失わないよう注意が必要だと思います。指針『民間信心と典礼』は神学的に深いものというより、実際的に体験的に学んでいくことを考えさせるもので参考になります。

「あいだ」を生きる

待降節は「すでに来られた救い主を待つ」季節です。南雲委員が話された、「すでに」と「いまだ」のあいだを生きるのが私たちの信仰ですし、典礼も秘跡もそのようなものでなければなりません。「すでに来た」ということを強調しすぎていけないし、「まだ来ていない」という暗い状況に落ち込ませるのもよくありません。両者の健全な緊張関係の中で生きていくということ学ぶことも大

切だと思えます。

降誕祭の起源

降誕節は、主の降誕の「前晩の祈り」から始まり、主の公現後の直後の主日まで続きます(「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」33番)。この季節の典礼色は白です。また、栄光の賛歌が歌われます。

12月25日に主の降誕を祝う理由には諸説がありますが、一つは不滅の太陽神の祭りをキリスト教化したことです。キリストも正義の太陽ということで、光として象徴されますからあまり違和感はないと思います。カウンターフェスティバル、「対抗祭」と訳すのでしょうか、キリスト教徒が異教の祭りに行き行って盛り上がる状況を解決するために、同じ日にキリスト教の祭りを置いたのも理由のようです。もともとキリスト教の教父たちは誕生日を好みませんでした。ただそれが意味のあることならばキリスト教化できるので、この12月25日も、異教の祭りをキリスト教化して定着しました。

降誕節の神学的な意義と特徴は、“*admirabile commercium*”(驚くべき交換、すばらしい交換)と呼ばれるものです。過越秘義の始まりとしての受肉、キリストの降誕の秘義は、「神が人間となり、それによって人間は神の子となる」という定式で表現されています。クリスマスの深夜ミサの奉納祈願は次のように唱えます。「主よ、私たちはこの聖なる夜を祝うための供えものを献げます。この聖なる秘跡によって、私たちが、神の命にあずかるにふさわしい者となりますように。私たちの主、……」。この「聖なる秘跡」と訳されている部分が、「聖なる交換(*sacrosancta commercia*)」です⁴⁾。

歴史的には必然性があつたわけではないでしょうが、降誕祭にはローマ古来の伝統に従って3つのミサをささげることができます。本来は教皇が聖ペトロ大聖堂で午前9時ごろに行うミサだけでしたが、5世紀になるとエルサレムからの影響で、地下に馬小屋が置いてあるサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂での深夜ミサが加わります。そして第3に6世紀以降、教皇がサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂でミサを挙げて聖ペトロ大聖堂に戻る途中、聖アナスタシア教会に立ち寄り、私的なミサを挙げるようになったのです。それはローマに在住していたビザンティン提督への友好のしるしとして行われたようです。ちょうどこ

の日は第1奉献文にも名前がある東方教会で重要な聖人であった聖アナスタシアの殉教日だったので12月25日を祝った、という歴史的経過があります。必然性というよりも、歴史の状況が生んだ3つのミサですが、神秘家タウラーはこの3つのミサの意味を、イエスの三重の誕生に結びつけました。第1は御父から御子の誕生、第2はおとめマリアからの誕生、第3は信者の中への誕生です。神秘家は、ときにインスピレーションを与えてくれます。たしかに私たちの中に生まれることがなければ、イエスの誕生を祝っても意味はありません。この考えは聖書からのものではありませんが、カトリックは聖書以外の伝承も多く、混乱しない限り理解の助けにすることができます。

降誕の8日間

降誕節には固有の8日間があります。主の降誕から1週間は、クリスマスとの直接の関係が見えにくいものもあります。聖ステファノ、使徒ヨハネなどです。これはおそらく、降誕節の8日間の成立以前に祝われていたもので、それに6世紀以降、幼子殉教者の記念が加わります。また、聖家族の祝日もあります。聖家族は明確なテーマではありませんが、血のつながりだけを強調してよいのか、という疑問もあります。聖書ではイエスが、神のことばを信じる人こそ私の母、兄弟姉妹だと言ひ、血のつながりを絶対視はしていません。「私が父の家にいるのをご存じなかったのですか」という神殿での場面もあります。何を中心として一つになるか、根拠をどこに置くか、という問いかけも大事です。家族仲良くという理解のみでの祝いではありません。聖家族の朗読でA・B・C年の共通点は、イエスの両親とのかかわり方です。マリアも初めは分からないので心に留めており、イエスについてはしだいに分かっていったのです。C年の聖家族の朗読はルカ2・41・52です。親子であっても血のつながりではない信仰のつながりの大切さが暗示されています。

1月1日の神の母聖マリアの祭日の聖書朗読は各年共通で、ルカ2・16・21です。羊飼いたちが拝みに来て、イエスに名前がつけられます。それが降誕節におけるマリアの位置づけです。マリアはつねにキリストとの関係において語られています。7世紀以前のローマでは、1月1日に聖マリアの日を祝っていました。途中で祝われなくなりまし

たが、1969年の典礼暦年の改定で再び1月1日が聖マリアの日となり、主の命名も記念する日となりました。教皇パウロ6世の使徒的勸告『マリアーリス・クルトゥルス』（1974年2月2日）によれば、1月1日にマリアを記念するのは、救いの神秘においてマリアが果たした役割を記念することを意図しています。さらにこの祝日は、その神秘が聖なる母にもたらした、たぐいまれな尊さをたたえることも意味しています。また、1968年以降、この日は「世界平和の日」となっています。

主の公現の祭日

そして、主の公現の祭日から公現祭節が始まり、主の洗礼まで続きます。公現祭の福音朗読は各年共通で、マタイ2・1-12です。テーマは全世界への主の公現、Epiphaniaです。このEpiphaniaはクリスマスよりも古く、起源はエジプトのアレキサンドリアです。東方では4世紀に3つの秘義“tria miracula”とって「3博士の来訪」、「主の洗礼」、「カナの婚礼における神の顕現」が祝われていました。考えてみれば、主イエスの生涯全体が主の顕現で、存在自体が主の現れのものです。この季節は其中で、主の初期における顕現を祝うもので、誕生前後の出来事の顕現を祝います。民間信心、伝承との関係ですが、聖書には「3人の博士」とは書かれていません。3つの贈り物なので3人ではないかと考えられ、やがて3人に名前がつけられていきます。カスパルという髭のある青年、メルキオールという髭のない老人、そしてバルタザールという黒人、つまり全世界からやって来た老いも若きもということです。キリストの救いの普遍性がそこにも表れています。主の公現の日には家の祝福をする習慣もあります。皆さんもなされたことがあるかもしれませんが、入り口の梁の部分に、「カスパル、バルタザール、メルキオール」と、その年の年号を書きます。彼らの頭文字を取ると「CMB」つまり「キリストがこの家を祝福してくださいますように」“Christus mansionem benedicat”の頭文字と重なります。民間の伝承はなかなかおもしろいですね。また、3つのささげものについて、レオ教皇の説教集では、すべての信じる人の中に起こっていることと言われています。正しい信仰をもっているすべての人の心の中で、同じ奉献が行われているのです。すなわち、キリストが世界の王であることを認め

ている人は黄金を、キリストが真の人間だと見る人は没薬を、御子が御父と等しい尊厳をもっていると宣言する人は乳香をささげて敬うのです⁵⁾。

主の洗礼の祝日には、2つの役割があります。第1は降誕節を締めくくる役割、第2は年間を開始する役割で、こうして区切りの祝日となります。

ここで典礼秘跡省の指針『民間信心と典礼』からの示唆を紹介します。イエスは神からのプレゼントだという考えに基づいて、クリスマスのプレゼントは、家庭での愛や隣人愛の実践として行うものだということです。そして6世紀に起源をもつ幼子殉教者(12月28日)は、現代における幼児、子どもへの暴力や虐待のような悲しい出来事を思って祈る日となります。ここに、キリストのあがないとの関連を見るのです。つまり、幼子たちは自分と無関係なことで殺されましたが、それをどのように捉えるのか。解決策はありませんが、キリストのあがないとの関連の中で光を当てるといふこと、その要素は公式祈願にも表れています。幼子だけでなく、現代でも私たちには理解できない出来事を、キリストのあがないとの関連に置き、その光の中で見るということが大事なのではないかと思います。「主の洗礼」の日は、灌水を行い、説教で主の洗礼の意味や私たちの洗礼の意味を確かめるのもよいと勧められています。

西方起源のクリスマスと東方起源のエピファニアは、キリストの誕生日という意味よりも、キリストの訪れ、来臨(parousia)、闇を照らすための光の訪れとして祝いが共通しています。場所、きっかけは異なりますが、どちらも闇を照らす光の訪れとして祝われています。繰り返しになりますが、これは、第1の受肉と第2の終末時の到来の間を生きる典礼、秘跡を再度考えるうえで大切なのです。日本語の「現臨」、「来臨」、「再臨」、「到来」という用語はそれぞれ強調点が少しずつ異なりますから、説明の際には言葉を選ぶとよいでしょう。「再臨」という用語を嫌う人もいますが、天に昇られた“この”イエスはまた帰ってこられる(使徒言行録1・11参照)とあるように、別のイエスではなく同じイエスがおいでになるのですから、「再臨」でもよいのではないかと思います。

典礼的「きょう」—すでに与えられたものを待つ
すべての季節においていえることですが、「教会はすでに与えられているものを待望している」⁶⁾

のです。「すでに来た」と「まだ来ていない」の間にあり、言葉としては矛盾しますが「すでに与えられたものを待っています」。到来しつつあるものを受けながら生きているのです。クリスマスや降誕節は毎年巡ってくるものです。けれども、それは同じ地平をぐるぐる回っているのではなく、螺旋状に進み、去年のクリスマスと今年のクリスマスと来年のクリスマスは同じでも異なるのです。螺旋状に進むというのは理解しやすいのではないのでしょうか。O・カーゼルの言うには、「目的であるキリスト自身に到るためには、少しずつ高くなって行く同じような道を何度も歩まなければならない」⁷⁾のです。円をぐるぐる回るのはなく、目的に向かって、終末に向かって進んでいくというのがキリスト者の生き方だということでしょう。

典礼的「きょう」によって、すでに来られた方を「ここに・いま」迎えるというテーマは聖書でも重要なことですが、典礼でもとくに大事なことです。「きょう」についていろいろありますが、分かりやすい短い文章を紹介します。「イエスの到来という歴史的な出来事を、人々が、自分たちにかかわり、その生活を改める何ものかとして理解するような〔特別な〕日」⁸⁾が、「きょう」なのです。ですから、イエスの到来という歴史的1回限りの出来事を、私のこととして受け止める日が「きょう」なのです。あるいは、フランシスコ会訳聖書の「ヘブライ書」の注釈には、「(きょうとは)神が人間に語るあらゆる瞬間のことで、この瞬間は世の終わりまで続く」⁹⁾と書いてあります。また、O・カーゼルの有名な言葉として、「降誕祭には『きょうキリストが生まれた』、公現祭には『きょう教会は天の花婿と結ばれる』、復活祭には『きょうこそ主の造られた日』、聖霊降臨祭には『きょう聖霊が火の形をして弟子に現れる』と歌う。これはいったいどういう意味なのであろうか。教会暦の一年は、全体として、神の永遠の救いの計画の描写であり、キリストの秘義を包含している。しかし、彼岸でのようにすべてを一瞬のうちに見通すことのまだできない〔地上の〕目にとっては、このような一年の循環のうちに秘義が展開して行く。一年が神の現存を内に秘めているように、一日一日もこの循環の中で、かつてその日を聖化した救いの出来事を再び取り上げる」¹⁰⁾、という説明があるように、典礼的「きょう」は大事です。

神の恵みはつねに注がれていて、イエスはつね

にともにいるのですが、私たちは通常それを意識していません。つねに到来している恵み、励まし、ゆるし、いやし、叱咤激励、そうしたものをあらためて思い起こして感謝し、味わって分かち合っ生きていく力にするなら、それが「きょう」になるのです。逆に、それなしには「きょう」は来ません。ここに、1 回限りのイエスの歴史的な到来という出来事を繰り返していくこと、「きょう」として受け止めていく意味があるのだと思います。ゆるし、愛、いやしは数字にはなりません、それを受け止め、分かち合って確かめて、生きていく力にするために集まる集会の数は数えられます。第1 主日、第2 主日のように。神のゆるしは回数ではない、けれども回数で受け止めるというのがまた、「きょう」にもつながってくると思います。

最後に、受肉は過越の秘義の始まりであることを確認したいと思います。先ほど白浜委員が話したことは、ヨアンネス・クリュゾストモスも言っ

ています。「もしもキリストが肉体の形をとって生まれることがなかったならば、『テオファニー』の祝いの基となったキリストの洗礼も行われなかったことであろう。また、パスカの基となったキリストの十字架の死は起こらなかったであろう。そしてまた、『ペンテコステ』の基となった聖霊の降臨もなかったことであろう」¹¹⁾。このように、主の過越の秘義の最初という意味でクリスマスを祝うのです。いろいろな主日、季節がありますが、主の死と復活の“*mysterium paschale*”（過越秘義）に結ばれ、そこから出て、またそこに戻る主日でなければなりません。それぞれの主日にはそれぞれの味、側面が強調されますが、それは1 回ではとらえきれない秘義の分節化というようなものです。そしてその顕現は、「光のサイクル」と「いのちのサイクル」による二大サイクルをなしているのです。

1) レイモンド・E・ブラウン『キリストは近づいているー待降節の福音』佐久間勤訳（女子パウロ会、1996年）20-38 頁参照。

2) 同 36 頁。

3) 同 37-38 頁。

4) J・アプリ『聖霊の季節ー待降節・降誕節』（新世社、1988年）81 頁。

5) レオー世『キリストの神秘』熊谷賢二訳（創文社、1965年）53 頁参照。

6) A. Nocent, *The Liturgical Year Vol. 1*, Collegeville, 1977 参照。

7) O・カーゼル『秘儀と秘義ー古代の儀礼とキリスト教の典礼』小柳義夫訳（みすず書房、1975年）109 頁。

8) E・シュヴァイツァー『ルカーー現代神学への挑戦』佐伯春郎・持田克己訳（新教出版社、1985年）82-83 頁。

9) フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書 パウロ書簡第4巻』（中央出版社、1975年）123 頁。

10) O・カーゼル前掲書 119 頁。

11) J・F・ホワイト『キリスト教の礼拝』越川弘英訳（日本基督教団出版局、2000年）92 頁。